

2009 (平成 21) 年 10 月 14 日 (水) 発行 三重大学教育学部国際交流委員会  
Website <http://international.edu.mie-u.ac.jp/index.html>天津  
便り

News from TNU

## 天津訪問

三重大学学長  
内田 淳正

まさに「北京秋天」の天津である。梅原龍三郎が「北京秋天」を画いたのは 1942 年、秋の空は深い藍色で夕日に薄赤く染まった雲を浮かべているが、残念ながら現在の空はモヤがかかっている。昨年のオリンピック後、北京は改善したが、工場移転のため天津の大気汚染はひどくなっているとのこと、ややホコリっぽく感じる。

天津師範大学の校内にあるホテルに着くと垂れ幕付きの熱烈歓迎である。このホテルの経営は大学とは関係がないとのことであるが、宿泊客はわれわれのような大学訪問者や大学関係者であるとのこと、いささか公的機関の雰囲気を感じさせている。広々とした部屋で快適である。水道水はやや濁っているが、お湯がふんだんに出るためシャワーも使いやすい。さすがにウォッシュレットはないが、水洗が詰まることはない。何力所か町中や観光地のトイレを使用した、日本や韓国には比べものにはならないが、かなり清潔になってきている。

天津師範大学はダウンタウンにある古い場所から郊外の巨大な新キャンパスに移転中である。新しく整備された広い構内を歩いて移動している学生が多く、自転車は予想外に少ない。中国は 9 月入学であるため、新入生の訓練が行われていた。迷彩服を着用しての軍隊式の訓練が 1 ヶ月続くとのことである。一人っ子政策で中国でも若者が優しくひ弱になっているので、この訓練は意味があると随行の中国側スタッフが説明してくれた。近いうちに国際交流処も三重大学がさくら 50 本を寄贈した桜庭園の前に移転してくるとのことである。数年後にはこの庭園で両大学の学生が親しく語り合う風景を想像すると顔が自然とほころぶ。

高学長、国際交流処の鐘処長、徐副処長、揚副処長、馬処員、金処員はじめ天津側は三重大学との交流に非常に熱心である。これまでの教育学部の努力によるところ大であることは言うまでもないが、現在滞在中の東先生、手塚先生の活躍は目を見張るものがある。現地に完全に溶け込んで、天津師範大学の先生方や学生の信頼が厚いことを肌で感じた。お二人の食べ過ぎ・飲み過ぎが唯一の気がかりであるが。



高学長と会談のあと記念撮影



ホテル前にて。玄関の上には歓迎の横断幕

中国建国 60 周年祝賀式典の準備のため北京、特に天安門前は厳しい警備である。至る所で警備員のチェックを受けるため長い行列ができています。紫禁城に入るのに相当の時間を覚悟するが、そこはグローバルスタンダードとは違う中国式入場法があることを知らされた。現在北京の大学で研修中の金処員が警備員と何やら話をすると、ノーチェックで入場することができた。彼に何を言ったのだと問いかけるとニッと笑っただけであった。後で東先生に聞くと、おそらく日本から賓客を案内しているのだとも言ったのだろうとのことであった。

故宮、長城、オリンピック村、新幹線駅など、巨大建築が好きな民族である。大きい、広い、多人数、多民族とスケールメリットを最大限に生かそう考えている国家である。その中で生き抜かなければならない民族の言語は極めて闘争的であるとの印象を改めて感じた。医学部整形外科に中国東北部より留学している先生との交渉で辟易とした記憶が蘇ってきた。また、現地の人同士が話しているのを聞くと喧嘩をしているのではと見間違ふ。私の関西言葉とはまさに正反対である。両者の使い分けができると有利な面が多い。

この交流もまだ一方通行である。天津よりの留学希望者に比べて三重大学は極めて少ないと聞く。天津師範大学を訪れて、中国の強さや弱さを身をもって感じて、自らを高めて欲しいと願うばかりである。

## 天津師範大学での参加型・双方向型の日本語学習

9月6日から2週間、天津師範大学に滞在させていただき、9月から2年生となる日本語三重コースの学生22人に、日本文化や日本語を教える授業を担当しました。天津を訪れる前には、「日本語を学び始めて1年足らずの学生たちに、私が授業で教えることができるのだろうか？」という不安がありました。集中講義の前に、東先生や手塚先生の授業を参観させていただき、学生たちの前向きな学びや会話力を知り、不安はすぐに吹っ飛びました。

授業の中では、日本文化の中でも、五七五（俳句、川柳等）、紙芝居、日本の歌等を取り上げましたが、講義型ではなく、参加型の学習になるよう心がけました。例えば、五七五の学習では、伊藤園「おいお茶俳句大賞」での中学生入選作品を5句ずつ読んだり、自分で絵を入れた俳句を作ったりしました。また、スカイプ（skype）を使って、天津師範大学の教室と、三重大学教育学部の実践センター、三重県内中学校、そして、我が

家をインターネットでつないで、遠隔学習にも取り組みました（私の専門の一つが遠隔教育です）。双方に、Webカメラを用意することができましたので、学生たちは、テレビ会議（Teleconference）をしながら、日本の学校で習っている童話や詩、歌や音楽、料理や家庭生活について学ぶことができました。やはり、スカイプで、双方の顔を見ながら話ができるのは、コミュニケーションが深まり、とてもよいことでした。

天津でいただいた料理は、何でもおいしく、もう一度食べてみたくなる味ばかりでした。「食生活は本当に豊かだな」と思いました。今度、中国を訪れた時には、自分で注文できるように、帰国後、NHK テレビ中国語講座などで、中国語の学習を再開しました。今、私が指導教員となっている許ティティさん（天師大からの留学生、ティは女に亭と書く字）が中国語の好老師です。



日語三重コース 22名の学生と 須曾野先生を囲んで

## 社会科教育講座 教授 秋元ひろと

### ホーチミン市師範大学との協定締結

7月28日、ホーチミン市師範大学（ベトナム）からの代表団を三重大学に招き、両大学間の協定調印式が行われました。ホーチミン市師範大学は、ベトナム南部の学校教員養成を統括する役割を担う国立大学で、3月に三重大学からの代表団が同大学を訪れたことをきっかけとして協定調印の運びとなりました。

調印式には、ホーチミン市師範大学からはヒュン・タイン・チュウ副学長（Dr. Huynh Thanh Trieu）、レ・ティ・ホン・ガー事務官（Ms. Le Thi Hong Nga）の2名、三重大学からは、内田学長、松岡副学長、上垣教育学部長ら7名が出席し、双方の代表者が「学術協力・交流に関する一般協定」および「学生交流協定」に調印して、両大学間の交流が本格的に始まることになりました。

調印式終了後、一行は教育学部を訪れ上垣学部長と懇談のあと、遠隔授業室、調理実習室、生物学実験室など教育学部の施設を見学しました。懇談の席では、交流の第一歩として、上垣学部長が日本人研究者の編纂したベトナム語の算数教材をチュウ副学長に手渡しました。同教材は小学校1年生から4年生までが学習する整数の四則計算に関する内容で、絵本形式によって、四則計算の仕方がよく理解できるように編集されたものです。これをうけて先方からも、とくに小学校教育や、幼児教育の分野での協力依頼がありました。具体的には、三重大学の教員がホーチミン市師範大学を訪れて、大学教員や学校教員を



学長室にて記念撮影

### 三重大学教育学部国際交流ニュースレター第10号：目次

天津訪問 .....	三重大学学長 内田淳正
天津師範大学での参加型・双方向型の日本語学習 .....	須曾野仁志
ホーチミン市師範大学との協定締結 .....	秋元ひろと
四日市市長表敬訪問 .....	秋元ひろと
古都クレルモンフェロンで（前編） .....	新田貴士
河南師範大学留学生帰国 .....	河南師範大学留学生

対象とした関連分野のセミナーを開催するなど、ベトナムにおける教育の質の向上にぜひ協力してほしいとのことでした。

懇談は短時間のものでしたが、今後の交流に向けた建設的な話し合いができたことについては、ガー事務官が日本語に、また懇談に同席して頂いた吉井教授（国際交流センター）がベト

ナム語にきわめて堪能であったことが大きく、国際交流を進め、国際理解を深めていく上で言葉の占める役割の大きさを再認識する機会ともなりました。

教育学部施設見学の際にご協力頂いた教員の皆様には、この場を借りてお礼申し上げます。

## 社会科教育講座 教授 秋元ひろと 四日市市市長表敬訪問

8月25日、天津師範大学からの留学生と指導教員の馬静先生が、四日市市市長を表敬訪問しました。四日市市は天津市と友好都市提携（1980年10月）を結んでおり、また、教育学部は四日市市教育委員会と連携協力協定（2006年11月）を結んで様々な取り組みを進めてきました。今回の表敬訪問は、四日市市と天津市、四日市市と本学部とのこうした縁で実現したものです。

訪問団の一行は午前9時に大学をバスで出発、四日市市到着後10時から市役所8階の来賓応接室で 田中俊行市長、水越利幸教育長との面談に臨みました。田中市長からは「勉学に励んで中国と日本の懸け橋になっていただきたい」と歓迎と激励の言葉を頂き、これをうけて馬先生が鐘英華学院長（天津師範大学・国際教育交流学院）から市長へのメッセージの紹介を交えて挨拶、引き続き学生を代表して趙浩童さんが「港湾都市であり、工業の盛んな四日市市は天津市と似ていて、故郷に帰ったように思います。四日市市と天津市、日本と中国の友好に貢献したい」と挨拶の言葉を述べました。

その後、田中市長が1988年に四日市市港から「日中友好青年の船」に乗り、はじめて天津市を訪問したときの印象を披露されるなど、和やかな雰囲気の中で懇談のひと時を過ごしました。また水越教育長からは、四日市市の小中学校を訪問して日本の初等・中等教育について見聞を広める機会をもっては、とのお誘いもいただきました。今回の表敬訪問がきっかけとなって、

天津からの学生たちの学びの場が広がることに期待したいと思います。

なお、四日市市から大学への帰路、一行は関宿を訪れて江戸時代の風情を残す町並みを散策、国際交流と異文化体験の充実した一日となりました。

表敬訪問の様子は、四日市市ホームページでも紹介されています。

[http://www.city.yokkaichi.mie.jp/kyouiku/infor/h21\\_tensin\\_houmon.html](http://www.city.yokkaichi.mie.jp/kyouiku/infor/h21_tensin_houmon.html)



全員で記念撮影・中央奥が田中市長

## 数学教育講座 教授 新田貴士 古都クレルモンフェロンで（前編）

このたび9月12日から21日まで、フランスのブレーズ・パスカル大学に大学間交流を兼ねて研究連絡に伺う機会をいただいた。ブレーズ・パスカル大学はその名のとおりに「パスカルの原理」のブレーズ・パスカルの生まれたフランス中央部の古い小都クレルモンフェロンにある公立大学である。その大学の数学教室にいる一人の数学者との研究連絡をしていくというのが

今回の出張の主な仕事内容であった。その彼との出会いは、たまたま日本の研究会に来ていたフランス人の数学者が彼のことを教えてくれたのがきっかけで、4年前に私が彼を訪ねて行ったことから始まる。かくいう田舎者の私は、おフランスは初めてだし、フランス語は全く何もわからないが、その彼とは妙に気が合って、また生き方や考え方が余りにも似ていることもあり、その時から心の兄弟としてつき合うようになった。お互いの根っここの部分はまるで双子のように似ているのだ。以下ではフランスの兄、仏兄と呼ばせてもらおう。但し「バカ！当たり前だろう！」とお叱りを受けるのを覚悟して、仏兄の兄の意味ではないことに注意したい。

その後も、毎年訪問するようになり、仏兄とは、数学のこと、研究課題のこと、文化のこと、芸術のこと、友人のこと、人生のこと、何でも話すようになった。場所も大学の研究室やゼミ室であったり、学食であったり、市街地のレストランであったり、散歩をしながらであったり、仏兄のお気に入りのカフェであったりする。そのような日々のなかでふと気がついたことがあった。話をしながら散歩をしていると、どうしても私が遅れ



横断歩道を渡るクレルモンフェロンの学生たち

るのである。確かに私は短足だ、仏兄が一步步間に二歩歩く必要がある。そのペースでなんとか頑張って歩いていても気がつくどうしても私が遅れているのである。おかしいなあと思って注意していると遅れ出す場所は横断歩道であり、特に信号機のある横断歩道で遅れを取っていることに気がついた。一度遅れを取ると、短足の私には遅れを取り戻すためにもっと早く足を動かせる必要があるので、更につらくなり、どうしても追いつけない、ヒーヒー言っても遅れるのである。

横断歩道で信号機が赤であれば私は止まる、しかし仏兄はこともなげに赤でも歩いてわたる。「赤じゃないか」と言うと、「車来ないだろう」と不思議そうに答える。「そうか、車は来てないのか」と私も車道を横断するが、私の方には少し罪悪感が残る、仏兄はというと何事もなかったかの様子で話を続けながら、横断する。その差が遅れの原因であったことに気がついた。初めは、仏兄はずるいやつだと思っていた。これは仏兄だけの現象かと思っていたのだが、よくよく町の人を見てみると決してそうではない、クレルモンフェロンの町の人々全てが仏兄と同じであった。いやフランス人全てが同じであった。

更に仏兄を観察してみてもっと驚いた。断歩道や交差点に来たとき、私はまず信号機を見てから、青であれば車が来てない

ことを確かめて、横断する。確かに私には変わっているところもたくさんあることは認めるが、横断歩道の渡り方で変わっているとは思えない。「青は進め、赤は止まれ」である。子供のころから叩き込まれたものがある。仏兄はというと、まず、車が来てないか左右を見る、そして車が来ていれば信号機に相談する、それは信号機を見るというより、ちらっとチェックしてあたかも相談するかのように私には見えるのである。車が来てなければ当然信号機は見ず、堂々と車道を横断する。仏兄はずるい人なのであろうか？またフランス人全てがずるいのであろうか？一体この仏兄と私の差は何なのだろうか？そのことがわからない私は夜ホテルでひとり悶々と考えこんだのである。どうしてもこの親しい仏兄がずるい人とか、フランス人全てがずるい人たちであるとは思えなかったのである。[前編・完]

(果たして仏兄はただの「ずるい人間」なのか？それとも…。後編では、天才物理学者湯川学にも匹敵する世界的数学者である「私」が、数式を用いてこの謎を解明す。数学的頭脳の本領発揮。話はいよいよ佳境へと突入。読者よ、待て、次号！When in Clermont-Ferrand, do as Clermont-Ferrandeurs do!)

## 河南師範大学留学生帰国

昨年9月に第3回交換留学生として来学した3人の河南師範大学生が帰国しました。帰国にあたり、感想文を寄せてもらいました。

### 光陰矢の如し 張楚含

光陰矢の如し。一年の留学生活はもうすぐ終わります。振り返って見ると、とても楽しくて充実した留学経験でした。初めはちょっと不安だったが、先生たちが親切してくれて、だんだん日本の生活に慣れてきました。日本の学校生活は中国とちょっと違いますが、いつも日本人の学生たちから助けてくれて、たくさんのことを教えてくれて、順調的に一年の勉強が終わりました。日本に来てから、一人暮らしを始めました。日本の物価が高いので、料理が苦手な私は自炊ことにしました。これをきっかけとして、いろいろおいしい日本料理の作り方を習いました。中国に戻ったら、家族と友達に作ってみようと思います。この一年間、東京、京都を始め、たくさんのところに旅行をして行きました。旅行の楽しみをしながら、日本の文化や風俗など中国で体験できないことがわかりました。三重大学での留学は私にとって、一生忘れられない貴重な思い出として、いつまでも心に残っています。



張楚含さん



張琳琳さん

### 留学の感想 張琳琳

去年の9月、新鮮な気持ちを持って、私とクラスメート三人が三重大学に着きました。最初に日本に着いた時は不安、心細さ、緊張、寂しさから毎日家が恋しくてたまりませんでした。しかし、先生達の親切さや温かさに触れ、日本人の友達の優しさに触れ、いつの間にか毎日が充実した楽しい日々になりました。三重大学教育学部の先生達が私たちのために歓迎会を開いてくださって、すごく感動しました。先生たちは熱心に指導してくださり、まわりの学生たちも助けてくれて、日本での生活がだんだん順調になりました。外国人留学生会館に住んでいて、様々な国々の人々に出会い、語り合い、わかり合い、今まで自分が生きた世界がいかに狭いものであったのかを知り、今まで自分がいかに狭い思考で物事を考えていたのかを思い知らされました。今、自分の日本語はまだ上手だとは言えませんが、中国で学んだ日本語教材とは違うより本場的な日本語を毎日耳にしたり、会話したりして、ある程度使い方が理解できるようになりました。また、留学生活での思い出はたくさんありますが、日本各地を回った旅行もそのうちの一つです。各地の旅行を通して、自分の知識や考え方の幅がぐんと広がり、大きく成長することができたように思います。一年間の留学生活を振り返って、短い文章にまとめるのはとても難しいと思います。留学で得た毎日がキラキラ輝く宝物のような日々でした。きっと一生忘れない。そしてこれからの私にとって、とても大事なものになると思います。

### いつかきっと 趙項毅

つい帰国の日が近づいて来る、もう親切な宮地先生と友達にさようならと言わなければならないみたいだね。ちょうど梅雨の終わりぐらいだろう。自分の興味ある研究ができるのは実にありがたいことです。だから、心の底から僕の研究に色々協力してくれた先生と友達に感謝しております。一年の間に、少しでも日本の文化や生活など色々体験しました。これは人生の貴重な経験として、必ず大切にします。ここでできた友達も、一生の友達になりだいたいと思っています。いつか、先生の研究室でゆっくりコーヒーを飲もう；いつか、友達と一緒に海の声を聞こう；いつか、津市の最高峰を登ろうか。必ず。



趙項毅君